

鈴木祥蔵編著 『美術教育の理論と実践』

海 老 原 治 善

はじめに

鈴木先生のおすすめで、美術教育者協議会の全国集會に参加したのは、71年度のことであった。美術教育の大切さは痛感していたがまったく勉強していなかったので助言者として出席することにはちゅうちょした。が、「生活綴方とリアリズム」との関係の話をしてくれればよいのだからという、巧みな鈴木先生のおさそいにひきこまれて参加を承諾してしまった。

出席して、美教協の先生たちの指導になる子どもたちの作品をまのあたりにみて驚いてしまった。ぼくの常識では考えられないリアリティのある、いやアクチュアリティといった方がびたりとくる作品群に正直圧倒されてしまった。そして、実践報告をきいてゆくうちに、その秘密がわかりかけてきた。一言でいってしまえば「自由にのびのび」と式の自然成長のいわゆる児童中心主義的教育論、美術教育論に立脚していないことが理論的根拠であることがつかめた。

なるほど、これは勉強してみなければと思った。そんな折、このたび、美教協結成10周年を記念して、その理論の集大成と、典型的な実践記録を一本にして鈴木先生の手で『美術教育の理論と実践』がまとめられ刊行された。鈴木先生は教育哲学思想を基盤に長年の研究の蓄積があり、現代的な偉大な百科全書派的風格をおもちで、誰もが、御自分と同じような関心と能力をもつとお考えのせいから、「海老原さん、この本の書評

を」と、これまた巧みに、結局、大任をおうせつかることになってしまった。あるいは、社会科学に傾斜しがちなぼくに対する全面発達への教育的配慮であったのかもしれない。

というわけで、読みにかかったのであるが正直いってむつかしく、書評など、とてもおぼつかない。そこで、内容の紹介をかねて、若干の読後感を述べて、責をふさぎたい。

1、美教協の立場

美術教育者協議会は、昭和36年、近畿美術教育協議会として発足、才八回大会で、全国組織に発展するとともに現在の名称にあらためられた。多くの民間団体が、東京に中心があるのに比べても、その野性的エネルギーが感ぜられるし、美術家の指導もあったのだろうが、教育学者と現場研究・実践者の結合という点も注目される。それにいわゆる実践家であると同時に、理論家である人々がリーダーに多いことも、日本作文の会とともに注目すべき組織といえよう。

会は、「わたしたちは、働くものの立場にたち、(1) 真実と人間らしさを求める美術教育の研究と実践をおすすめします (2) 人類が創造してきた美の遺産を正しく継承発展させます (3) 世界の平和と日本の民主化、ならびに生活と文化の向上につとめます」という趣旨のもとに結成されている。

鈴木氏は、この綱領的趣旨につきのような

コメントを加えている。オ一について「私たちは美の問題としても、単なる視覚的、感覚的リアリズムを求めることで終ってはならないと考える」（まえがき）として、「美術教育はその意味で真実を見ぬく力を養う教育のいとなみ全体の一つの重要な分野であるということになる」と主張される。オ二点は、「戦後の美術教育の思想は圧倒的に児童中心主義的であったし、自然成長論的であった。」とし、「この立場は、戦前の文部省図工科の『お手本主義』や『教え込み主義』を否定するために通過しなければならない重要な一過程であった」との評価を加えながら、その自然成長性をきびしく批判される。

そこから、目的意識的でかつ、子どもの主体的な学習を組織していく美育論が探究されてゆくことになる。オ三点は、美育独自の目標というより、教育をすすめる立場の確認であるが、とくに、美育にかかわっては、想像性（イマジネーション）に裏付けられた創造性の主張と民話、童話、文学と美術の給合が主張されている。

2、本書の構成と論点

本書は、オ一篇鈴木氏の手になる「美術教育の理論」と、オ二篇、美教協会諸氏の手になる「美術教育の実践」から構成されている。

鈴木論文は、「美術教育における“自然成長理論”批判」、「美術教育の立場と問題」、「生活綴方の思想的背景」、「子どもらにとつて、“リアリズム”とは何か」の五篇からなっている。実践篇は「幼稚園からの実践報告」（山下多香子）、「物語絵『かにむかし』（小学校一年）」（別所明芳）、「写生画『私の家・村の家』（小学校低学年）」（高見篤良）、

「生活画『松屋町の村すずめ』（小学校五年）（平井淳）、「主題画『高師の浜』（小学校六年）（栗岡英之助）、「写生のしごと『茶碗を持つ手から飯を食う手』（中学一年）」（宮本正彦）、「装飾のしごと『つるの紋様』（中学一・二年）」（宮本正彦）の七本の論文からなっている。

私の読後感、つまり素人の実感からいえば、まず理論篇をよんで、それから実践篇へとゆくより、実践篇から入って、具体的な実践の息吹きにふれ、それを可能にした、理論的根拠は、なんであったかということにかえて、鈴木論文を味読してみる方が、理解が深いものになるのではないかと思われた。

さて、オ二篇の各論文は、いずれも珠玉の実践記録であり、ひとつひとつから感動が湧いてきて仕方なかった。差別と選別のテスト・受験体制のなかで、まさに、「これを見よ」と父母の前に提出しうる実践の集大成がここにはある。それが、自然成長性理論の批判と克服の立場にたって展開されている。たとえば幼稚園の山下実践の場合、形の原基や色の原基などを、「あそび」をとおしての基礎づくりの仕事から「ごろはちだいみょうじん」の物語絵の実践にも見事に展開されている。物語をよむ。汽車や線路の実際の見学にゆく。汽車の立体模型の共同製作や、たぬきの粘土づくり、そればかりか紙人形づくりと、教師のち密な指導性にうらぎられ、写生の重要性からイメージづくりまで、実に心にくいだけでもいう実践が展開されている。113ページの第一回目の絵と、教師と子どもとのとりくみのあとでかかれた92ページの最終の段階の絵を対比したとき、これが「教育」なのだど鮮烈に思い知らされた。

別所実践にも感動した。物語絵『かにむかし』の指導のなかで、「みんなそろっていよいよさるのばんばへ行くことになった時のかにたち」の表現に「A班は子どもたちがつくったかにに大小があったから、中の内陣に小さいかにを外側に大きいかにをめぐらして、万が一にそなえていると主張した」という記述がある。

子どもが物語を真に自分のものとしてよみとり作中に没入し、しかも、いよいよ行動をおこすときのヒューマンな集団の姿を、具象的に表現していることに驚きをもたされた。そういえば、この書物の表紙の絵が一年生の作品だと最初きかされてびっくりしたが、その秘密が、この別所実践をよんでとけてゆく気がした。といった調子で、各篇、まことに感動にみちたものであった。

3、今後への課題

そこで最後に二、三の要望を記して終りたいと思う。オ一にこの書物一冊からでは、美教協の主張する絵の指導の系統をよみとることができなかった。すでに会員にとっては、自明なことなのであろうが、その点、鈴木論文のなかで、文部省型美育論を対比して、美教協の系統性を明らかにしてほしかった気がする。もちろん、原基の指導、物語絵、写生画、生活画、主題画、紋様（デザイン）という一応の系統がだされているようにもよみとれたが、書名が「美術教育の理論と実践」とあるので、それがほしかった気がする。

オ二に、これは、まったく素人的な読後感なのだが、鈴木論文において「幼児の『知的リアリズム』からこれを越えて『感覚的、視覚的リアリズム』の段階にすすめる必要を述べた。しかし、『感覚的、視覚的リアリズム』

も次に乗り越えられる一階段にすぎないのである。乗り越えられる方向、そしてその次にあらわれる段階は何か、それが芸術上の真のリアリズムの段階であり、名づけて『生活リアリズム』とでもいうべき段階である」と述べられている。

行論の限りでは、まったく同感なのであるが、子どもの表現形態の問題として、美教協のいう写生、物語、主題、生活画のほかに、もう、子どもの絵の表現形態はないものなのかということなのである。より具体的にいえば、抽象的な絵画は、基礎技法なしにやれば、どうしようもないものとなることはわかる。しかし、それは、わかっているのだが、わが家のように生れたときから高校生まで、まったく団地生活をしてきてしまっていると子どもにとっては、どうも写実的な絵画より抽象的な、幻想的かつリアリティのある絵画に心ひかれるようである。

情操に欠けるから緑を、ロマンをとというのではどうもかたずかないような気がしてならない。そのあたりは、都市化してゆく子どもをかかえている昨今、美教協の先生方はどう考えられておられるのだろうか。

オ三に、これと関連するが、この書物のなかでも造形には、絵の表現とともに力を入れているのは各実践篇からうかがうことができる。そこで問題なのは、手工というのか、工作というのか、技術というのか、この面の指導をどう考えられているかという点である。もちろん、それは、美術の領域をこえ、技術の領域にふみこむことになってしまい、範囲をこえる課題であるのかも知れない。

しかし、子どもの生活のなかでは、きわめて大きな興味と関心と要求をもっている分野

ではある。この点の論及もよまして頂きたかった。デザインについても、民族的伝統からのとらえなおしが試みられているが、より、科学技術革命の将来からの問いかけからのデ

ザイン教育への論及も知りたかった。ともあれ、大変学問的刺戟を受けた書物であった。広く読まれることをおすすめする。

(明治図書, 1972, 2月刊)